

## アティーシャの『菩提道灯論細疏』和訳(1)

望月海慧

## はじめに

アティーシャ (Dīpaṅkaraśrījñāna, Atīśa<sup>1</sup>) の代表的な著作として知られる『菩提道灯論(Bodhipathapradīpa)』はチベット仏教思想史に大きな影響を与えたばかりでなく、その最初の英訳が発表されてから百年もの年月を経て、さらに新たな英訳が発表されるほど現代でも広く読まれているテキストである。悟りを得るための道が簡略に記されているために、仏教を容易に理解するためのテキストとして広く受け入れられたのであろう。本論に対しては我が国においても多くの研究論文が発表されているが、残念ながらその全体の和訳はまだ

注1 この名称 (Atīśa or Atiśa) に関しては、Eimer 1977: 17-22, 御牧1996: 239 に論じられているが、私はその判断を保留する。そのような呼称よりも

Dīpaṅkaraśrījñāna という名で呼ぶべきであると思うのだが、本稿においても一般的なアティーシャという曖昧な呼称で記す。

注2 この Sarat Chandra Das による英訳を含め、アティーシャに関する研究については、塚本1990: 299-303 を参照のこと。なおそこに含まれていない BPP の現代語訳に関する情報は、Eimer 1985: 17-18 を参照。

注3 R. M. Davidson, Atiśa's A Lamp for the Path to Awakening, *Buddhism in Practice*, D. S. Lopez, Jr. ed., Princeton 1995; Ruth Sonam, *Atiśa's Lamp for the Path to Enlightenment*, Commentary by Geshe Sonam Rinchen. Ithaca 1997. 後者も『菩提道灯論』に対する新たなチベット人による注釈としてとらえるべきであろう。

発表されていない。<sup>#4</sup>

今回は『菩提道灯論』に対する著者自身による注釈書<sup>#5</sup>のうち、最初のセクションの和訳を提示する。根本偈<sup>#6</sup>に関しては、全文が引用されてはいないので、本文には出てこない場合があるが、その際には注記において和訳を提示することにした。この部分は、根本テキストの最初の帰敬偈と本論の三種のブドガラ<sup>#7</sup>についての偈<sup>#8</sup>と三宝帰依の偈に対する注釈箇所<sup>#9</sup>あり、偈頌の数では八偈<sup>#10</sup>が相当する。和訳を提示する前に、今回和訳を発表する箇所の根本テキストである『菩

注4 比較的短いテキストであるので、全体の和訳をなした学者は多く存在するであろうが、残念ながらそれらは公表されていない。水野弘元他編『新・仏典解題事典 第二版』(1977,春秋社)所収の高崎直道による解説は、本テキストの内容を簡略にまとめている(おそらくYoshimura 1951:50-78による)。これによると全体は帰敬偈に続いて、(I)上中下の三士、(II)帰依三宝、(III)発菩提心、(IV)増上戒学、(V)増上心学、(VI)波羅蜜乘、(VII)秘密真言の略説となる。BMDPの構造については、Eimer 1978: 161-167も参照。

注5 全体の英訳がすでに Sherburne 1983 においてなされている。テキストを忠実に訳したというものではないが、その最初の現代語訳である。H. Eimer による書評が *The Journal of the Tibetan Society*. 3, 1983: 63-67 に、J.I.Cabezón によるものが *Journal of the International Association of Buddhist Studies*. 7-2, 1984:224-226 に掲載されている。

注6 用いたテキストは東京大学文学部印度哲学印度文学研究室編集のデルゲ版(No. 3948:Khi 241a4-248b5)と西藏大蔵経研究会編の北京版(No. 5344:Ki 277b-286b4)とであり、チョーネ版とナルタン版は未見である。また *Bo dhi pa tha pra dī paṃ pra ddi*, *Byang chub lam gyi sgron me'i dka' 'grel mdzad pa po*, Varanasi 1990 というテキストも出版されているが、今回は参照していない。

注7 BPP の偈頌の数え方に関しては、Eimer 1978 に従う。

注8 この箇所はツォンカバの『ラムリムチェンモ』に大きな影響を与えたと言われているが、その導入部がこの偈に基づいて記されているだけで、本論に関してはアティーシャの影響はそれほどないようである。

注9 ここの供養論に関する部分は、磯田 1989 に詳細な解説をともなった和訳研究が発表されている。本稿においても、大いに参照させていただいた。

注10 Eimer 1978 のラインで数えると、1-36 に相当する。

提道灯論』の構成をチベットのローデンサンペル・テンジン・ニェンタックの<sup>注11</sup>注釈書に見られるシノプシスに基づいて示しておく。<sup>注13</sup>

[Synopsis of Bodhipathapradīpa  
based on gZhung don gsal ba'i nyi ma (1)]<sup>注14</sup>

1. 冒頭部の意味

- 1.1. タイトル
- 1.2. 呼びかけ
- 1.3. 敬礼の表明 [1-2]
- 1.4. 著作する誓願 [3-4]

2. テキストの意味

- 2.1. 三種の人の大まかな提示
  - 2.1.1. まとめた解説 [5-8]
  - 2.1.2. 詳細な解説
    - 2.1.2.1. 劣った人の提示 [9-12]
    - 2.1.2.2. 中程度の人の提示 [13-16]

---

注11 Brag dkar sprul sku Blo ldan bzang dpal bstan 'dzin snyan grags. その生存年代は確定されていないが、19世紀であろう。Cf. Eimer 1978: 50 Anm. 25.

注12 Byang chub lam gyi sgron ma'i 'grel pa gZhung don gsal ba'i nyi ma. Cf. Eimer 1978: 50-51, 213-253. Eimer の同書に見られるテキストは一つの本版のものにしか基づいていないとことわっているが、その前の構成の概要を参考させていただいた。

注13 Eimer 1978: 193-212 には他の二つの注釈書(Blo bzang chos kyi rgyal mstahn (1567-1662) と dBal mang dKon nchog rgyal mtshan (1764-1853) のもの)に基づいた BPP の構成の概要の分析が報告されているが、その区分はより詳細であるため、ここでは簡略な方を利用した。

注14 『テキストの意味を明らかにする太陽』というタイトルである。

- 2.1.2.1. 勝れた人の提示 [17-20]<sup>注15</sup>
- 2.1.3. まだ生じていない菩提心の生起
  - 2.1.3.1. 短い表示 [21-24]
  - 2.1.3.2. 詳細な解説
    - 2.1.3.2.1. 菩提を願望することを本質とする心の生起<sup>注16</sup><sup>注17</sup>
      - 2.1.3.2.1.1. 準備
        - 2.1.3.2.1.1.1. 七支の供養
          - 2.1.3.2.1.1.1.1. 場所の荘厳と基礎を広げること [25-26]
          - 2.1.3.2.1.1.1.2. 本質的な七支の供養<sup>注18</sup> [27-30]
        - 2.1.3.2.1.1.2. 帰依
          - 2.1.3.2.1.1.2.1. 心を確実に高めるための準備 [31-32]
          - 2.1.3.2.1.1.2.2. 本質的な帰依 [33-36]

## 『菩提道灯論細疏』和訳

インドの言葉で、Bodhimārgadīpaṇjikā<sup>注19</sup>

---

注15 Eimer 1978: 198 における二つの注釈書によると、BPP の以下の本論の偈はこの「勝れた人」に関する支分の下にある。

注16 もう一つの項目は「菩提に入る心」である。二種の菩提心については BCA I 15 を参照。

注17 以下のセクションの BMDP の構成に関しては、Mochizuki 1988 を参照。

注18 このセクションの BMDP の構成に関しては、Eimer 1978: 168-170 を参照。

注19 本論に対する根本偈は、そのサンスクリット・タイトルを Bodhipathapradīpa と与えられている。対応する箇所チベット語訳は同一にもかかわらず、そのオリジナルとも考えられているサンスクリットには同義の他の語が用いられている。これに対してはいくつかの原因も考えられようが、別の機会に述べることにする。なおこのようなサンスクリットのタイトルが異なる問題の似た事例に関しては、第56回日本宗教学会(1997年9月、慶応大学)での発表「アティーシャに帰される二つの『心随撰集』について」の際に配布した資料を参照して頂きたい。

チベットの言葉で、『菩提への道の灯細疏』

聖母尊者ターラに敬礼をする。

マンジュシュリー法王子に敬礼をする。

三真言の王チャクラ・サンヴァラと、世間の自在天と、ターラに敬礼をする。

マイトレーヤ、アサンガ、師スヴァルナドヴィーパ、マンジュゴーシャ、シャーンティデーヴァ、ボーディバドラという師たち<sup>注20</sup>に献身的に敬礼をしてから、太陽の光のような細疏が著される。

菩提座に趣く善妙なる道が、この月の光のような『道の灯』である。ここにおいて僅かでも明かではないものは、太陽の光のような細疏により道が明らかにされる。

論書を著す論理を備えていなくても、熱心に望み、尊敬している弟子が要請し、仏が説いたものを広げ、教義に矛盾する論難を鎮めるために、太陽の光のような細疏が著される。

賢い者たちには珍しいことが起こされ、普通の人たちが理解し易く、劣った人たちが情欲を整えるために、この細疏が著される。

短いテキストには多くの意味があり、この論書は理解し難い。聖者たちを離れることで、どこにおいても迷ってしまう。

---

注20 ここにナーガールジュナの名が挙げられていないことには注意の必要があろう。後代のチベットで解釈されるようにアティーシャが中観論者であるならば、この師の名をまず挙げなければならないはずである。しかしながらここにおいて最初に挙げられるのは瑜伽行派の開祖とされる二人の論者である。本テキストの後半には中観思想が重要な役割を果たすかのように記されるが、それには慎重な判断を要する。アティーシャのこのような態度に関しては、袴谷 1989: 131-134 を参照。また彼が直接に受けたとされる師に関しては、『テプテルゴンボ』(Cf. 『青史 上』四川民族出版社 1984: 298-299, Roerich 1979: 243-244, 羽田野 1987: 71-72) に記されている。Cf. also Eimer 1979: 012, 048.

それ故に知恵のある人が師を喜ばせて、師が継承した系統に由来する正しい助言がお願いされる。

ここに聖なる師スヴァルナドヴィーパと聖なる尊者である師の吉祥なるボーディバドラの宝の瓶のようなお口からの甘露のようで、蜂蜜のような助言の水滴を、王族の弟子のチャンチュップ・オウーと長い間近くで仕えていた弟子の比丘トゥルティム・ゲルワーの二人が何度も願い出す前でまき散らされた助言の滴がここに、師の口や経典などに従ってからまとめられるべきである。

チャンチュップ・オウーがいつの時も私に説明を七度たずねるので、「根本〔頌〕におけるその意味が明かではない」という要請のために著される。

昔の規範師で偉大な賢者ヴァスバンドゥにより〔『釈軌論』に〕、

経典の意味を説く者たちは少しの助言でさえも与えなければならない。すなわち、必要性をとまなうことと、まとめた意味をとまなうことと、語義をとまなうことと、関連をとまなうこと、反論と答をとまなうことにより説明されなければならない。<sup>註21</sup>

と解説されているので、ここにおいても知恵を備えている者と、師となる賢者に依る者たちがそのような在り方の通りに準備をしたならば、大乘の善妙なる道すなわち偉大な人の宗教で大きな馬車のこの大きな道をすぐに理解するであろう。

経典などの聖教と論書と、師たちによるテキストのように、菩薩たちの道が私により確実に解説されるだろう。

---

注21 山口 1973: 161-162 を参照。これによるとこの句はブトン仏教史にも引用され、また Haribadra の *Abhisamayālaṃkāra* にも引用され、そのサンスクリットを回収することができる。*Abhisamayālaṃkāra*, Wogihara 1973: 15.24-25:

prayojanaṃ pravṛṭṭy sa-piṇḍārthaṃ padārthaḥ sānusaṃdhikāḥ /  
sa-codya-parihāras ca vācyaḥ sūtrārtha-vāḍibhiḥ //

それは何かと言えば、

三時におけるすべての勝者たちと、その法と、僧たちに対して大いなる尊敬により敬礼をする。善妙なる弟子のチャンチュップ・オウーが請願するので、菩提への道の灯をよく明らかにする。[BPP 1-4]<sup>註22</sup>

などというテキストがこれである。それらのテキストは何かと言えば、「三時」などと言われる。「三時」などという第1パーダは理解し易い。「善妙なる弟子」とは大乗の法器であるから。それは誰かと言えば、「チャンチュップ・オウー」というのがこれである。「請願するので」とは、彼が私に次のように、

チベットのこの地方から仏が説いたこの大乗の道を誤って理解した人が師や善友により完全に把握されていないものをお互い論争し、自分自身の論理により深くて広大な意味を自らの考察で分析しており、それぞれ相違する点がたくさんありますので、彼らの疑惑を取り除くことをお願いいたします。<sup>註23</sup>

と私に何度も請願するので、彼のために私は経典などに追隨してから「菩提への道の灯をよく明らかにする」のである。その「菩提への道の灯」とは何かと言えば、

聖なる衆生であり、最高の菩提を [BPP 21]

と言われるものから、

注22 以下の本稿において、『菩提道灯論』の本偈に対して Eimer 1978 のテキストに付された行数を付す。これはアティーシャのテキストでは一偈を四句で区切らないケースがあり、研究者により偈の番号が異なる事例が生じるからである。Cf. Eimer 1978: 17-20, Eimer 1986: 8.

注23 Cf. Eimer 1978: 9, Eimer 1979: 267, Roerich 1979: 248, 羽田野 1987: 74. これらの情報によると、BPP はアティーシャがチベットに入り(1042)、ガリにあるトディン(mTho lding)寺に滞在していた三年の間に記されたことがわかる。しかしながら BMDP が著わされた時期に関する情報はなため、こちらは確定し難い。同寺に関しては、Gyurme Dorje, *Tibet Handbook with Bhutan*, Bath 1996: 425-429 を参照。

その人が理解することに過失はない。[BPP 272]<sup>注24</sup>

というまでの教義がこれである。

そして「劣った」というのから「最高である」<sup>注25</sup>という教義により大乘の器と器でない者とが示されている。すなわち、最低の人と、真ん中の人は以下に説明されている。言葉の意味は理解し易い。

自らが相続している苦しみにより、誰であれ他者の苦しみをすべて完全に尽くすことを望んでいるその人は、最高である [BPP 17-20]

ということにより、大乘の器が示されている。この意味を意図してから次のように【『大乘莊嚴經論』】に、

菩薩は衆生に対して、一人の子供に対してするように、骨の髄の底から

注24 根本偈には、これに続いて、

尊敬されるべきディーバンカラ・シュリーによる經典などの教えからの解説を見て、チャンチュップ・ウーが請願してから、菩提への道を解説したものを簡略まとめた。[BPP 273-276]

という句がある。Cf. Eimer 1978: 20.

注25 これは根本偈の、

劣った者、中程の者、優れた者とにより人を三種として知るべきである。それらの特徴を明らかにして、それぞれの区別が著わされるべきである。

誰であれ何らかの方法で輪廻の楽しみを自分自身のために願っているその人は一番下の人であると知るべきである。

存在の楽しみを後ろに廻して、罪となる行いから退くことを本質として、自分の寂靜だけを求めている人は中程度であると言われる。

自らが相続している苦しみにより誰であれ他者の苦しみをすべてに完全に尽くそうと望んでいるその人は最高である [BPP 5-20]

のことである。これらの三偈はツォンカバの『ラムリチェンモ』にも引用され、三種の人として詳細に論じられている (Cf. Kelsang 1991: 46-47 [LRC 52a6-53a3]、長尾 1954: 86 によると、同論には BPP は20回引用されている)。またこの偈はカギユ派のガンポパによる『道次第解説の宝飾』にも引用されている (Cf. Guenther 1986: 17-18、山口 1988: 239-240)。

注26 Tib.: skyes bu tha ma. 「最後の人」とあり、「勝れた人」のことで解釈することもできるが、続く解説が「勝れた人」に対するものであるので、これを「低い人」のことで解釈した。Cf. Eimer 1978: 151.

愛する。そのように常になすことが望まれる。<sup>注27</sup>

また、

例えば鳩が自分の子供を最高に愛し、その自分の子供を抱いて座っている。それと同じ場合に怒りが矛盾するように、慈愛をもつ者は有身の者が子供に対する場合と同じである。<sup>注28</sup>

と説かれており、規範師で大賢者のヴァスバンドゥによっても次のように【『俱舍論』に】、

下位の者は、それぞれの方法により自らの相続に属する楽しみを求める。中位の者は、苦しみを退けるだけであり、楽しみを【求める】のではない。何故ならばそれは苦しみの拠り所であるから。上位の者は自らの相続にある楽しみにより他者たちにおける楽しみと苦しみを完全に退けることを求める。何故ならばその【他者の】<sup>注29</sup> 苦しみにより彼が苦しむからである。

と説かれており、また、

誰であれ他者の苦しみにより苦しみ、他者の楽しみにより喜び喜悅するが、自分のものではない、というような種姓を備えている人たちは、自ら

注27 MSA XIII 20 [Lévi 1983 tome 1: 88, tome 2: 158, Thurman 1979: 177, 宇井 1961: 284]:

bodhisattvasya sattveṣu prema majjagataṃ mahat /  
yathaika-putrake tasmātsadā hitakaraṇaṃ matam //

注28 MSA XIII 22 [Lévi 1983 tome 1: 88, tome 2: 158, Thurman 1979: 178, 宇井 1961: 285]:

yathā kapoti svasutātivatsalā svabhāvakāṃstānupaguhyā tiṣṭati /  
tathāvidhāyāṃ pratigho virudhyate suteṣu tadvattsakṛpe 'pi dehiṣu//

本偈はアティーシャの RKU にも引用される。Cf. Mochizuki 1996: 63.

注29 AKBh: 182.16-19, 山口 1955: 469, Pāsādika 1989: 70 [249]:

hinaḥ prārthayte svasamtatigataṃ yais tair upāyaiḥ sukhaṃ  
madhyo duḥkhanivṛttim eva na sukhaṃ duḥkhāspadaṃ tad yathā/  
śreṣṭhaḥ prārthayate svasaṃ tatigatair duḥkhaiḥ pareṣāṃ sukhaṃ  
duḥkhātyantanivṛttim eva ca yatas tad duḥkhaduḥkhy eva saḥ//

AKBh においていずれかの經典からの引用された偈頌であろうが、確認はできない。Poussin 1980: tome 2, 192 の注2は、比較資料として DN iii 233, AN ii 95 を指摘する。

の楽しみを見ず、他者を苦しみの大河から救出できるだろうか、と思つて努力をする。本質により慈悲を修習する力により自らの苦しみも他者の楽しみとして明らかに喜ぶのである。<sup>注30</sup>

と説かれている。それによりいかなる人であれ本質により他者が苦しんでいるのを見たならば、耐えられずに自身と他者を交換しようと思ひ、一人の子供が深みに落ち、大河によりさらわれ、燃えている火の中にいるのを見たならば、彼は耐えられないように、辺境の者たちを一人の息子のように見るその人がここにおいて大乘の器として賞賛される。そのようなその偉大な衆生に対して、どのようになすべきかと思うことについて、

師たちにより説かれた正しい方法が解説されるべきである。<sup>注32</sup>

[BPP23-24]

というのがこれである。そのうち「師たち」とは尊者で吉祥なるボーディパドラ<sup>注33</sup>と尊者スヴァルナドヴィーパ<sup>注34</sup>たちである。「正しい方法」とは[三宝]<sup>注35</sup>に帰

注30 AKBh: 182.6-14, 山口 1955: 468-469:

parārthaṃ ta iyantaṃ yat namārabhante kathaṃ parānapi mahat  
duḥkhoghāt paritrātuṃ śaknuyāmiti/...gotrāntaram eva hi  
tat tathājātiyaṃ nirvṛte yat pareṣāṃ duḥkhena duḥkhāyate sukhena  
sukhāyate nātmana iti/na te punaḥ svārtham anyāṃ paśyanti/

注31 Cf. RKU Tib. D. Ki 102a5-6, Mochizuki 1996: 64.11-14.

注32 根本偈にはこの前に、

聖なる衆生であり、最高の菩提を望んでいる者たちに対して [BPP 21-22]  
という句がある。

注33 Cf. 松本史朗「ボーディパドラ」(三枝充慈編『インド仏教人名辞典』法蔵館, 1987: 235-236. また K. Mimaki, *La Réfutation bouddhique de la permanence des choses et la preuve de la momentanéité des chose*. Paris 1976: 7 では、彼の年代を (c. 10-11 s.) とする。

注34 スヴァルナドヴィーパ出身のダルマキールティと記すべきであろうか。彼については、Chattopadhyaya 1967: 84-85, Eimer 1981: 74, Sarkar 1986: 36-41 を参照。

注35 Cf. Eimer 1978: 162.

依をすることと二種の菩提心<sup>注36</sup>と了知(abhijñā)を起こしたの後に特殊な利他をなす方法と方便と智恵とが結合する二つの集まりを集める方法と自利と利他をすぐに完成する偉大な大乘であるマントラの見解の共通でないものの二つを集める方法とである。

そのようなそれらの方法を詳しく解説することを望んでから、

完全なる仏の像などと [BPP 25]

というのから、

その人が理解をすることに過失はない。[BPP 272]

というまでである。三 [室] に帰依をすることとは、解脱の大城邑に入る門のようになったものと、菩提心の根本のようになったものにがそれを説いたものを望んだ後に、

完全なる仏の像などと、聖なる塔に向かってから [BPP 25-26]

などという12バーダ<sup>注37</sup>により示されている。「向かってから」とは、

注36 菩提を願う心とそれに入る心とである。この二種の菩提心は他のテキストにおいてもしばしば言及され (RKU: Tib. D. Ki 105b1, Mochizuki 1996: 74 and note 105)、その典拠はシャーンティデーヴァの BCA にある。BCA I 15: Minayev 1889: 156, Poussin 1901: 23 [cf. Weller 1950: 3]:

tad bodhicittam dvididham vijñātavyam samāsataḥ /  
bodhiprapidhicittam ca bodhiprasthānam eva ca //

Cf. Poussin 1907: 5, 金倉 1965: 6, Pezzali 1982: 58, Steinkellner 1989: 24, Crosby 1996: 6.

注37 これは根本偈の、

完全なる仏の像などと聖なる仏塔に向かってから、花や香や物といった何らかの価値のある供養をすべきである。【普賢行】にお説きになられた七種の供養も [すべきである]。

菩提座に至るまで不退転の心により三宝をよく信じ、膝を地面につけてから掌を合わせた後に、最初に帰依を三度すべきである [ BPP 25-36 ]

というものである。内容はこのセクションに説かれる三宝への帰依を説いたものであるが、これを「三偈」とは言わず、「12バーダ」と言うことは注意が必要であろう。

如来身を眼の前に向かい、見てから菩提心が生じる。

と大乘經典である『教誡王經』<sup>注38</sup>の昔の因縁譚<sup>注39</sup>にもみられ、善友たちも述べている。広大な義軌は後で示すであろう。次のように置いた二十七のマンダラ<sup>注40</sup>に三宝のそれぞれの像を配置し、十方の世間界におられる清浄なる三宝もそれぞれの場所に招来し、またそれら同じ国土に自分自身が座ることを願う。すなわち身体の変化した姿で仏と菩薩のそれぞれの前に自分自身が座ることを思い、[両手で]器の形を作ったり指を交差して、頭の上で掌を合わせてから供養の行いを完成させ、『三蘊經』[に説かれていること]をなし、師に対して供施をなして、帰依をすべきである。さらにまた三宝は次の通りである。すなわち真実の三宝と眼の前に置かれた三宝とであって、<sup>注42</sup>そのように知って先行するべきである。

花や香や物といった [BPP 27]

とは財物の供養 (āmiṣa-pūja) を示している。

七種の供養も [BPP 30]

彼の偈頌により書かれたテキストには、4バーダを一偈として数えることができない事例が多くある。チベット語への翻訳上の理由からこのようなことが起きた可能性も考えられるが、それ以前のサンスクリットの段階でこのようなことがあったとも考えられる。少なくとも彼自らが翻訳者であることから、彼は一偈を4バーダで終わるということに重要な意味をもっていなかったのではないだろうか。

注38 Rājāvavādakasūtra. Tib. P. No.887. Eimer 1978:176 は Śik.: 10.12 (etac ca bodhicittam rūpakāyadarśanotpannam; Tib. D. No.3939 Khi 8b3: byang chub kyi sems de yang gzugs kyi sku mthong ba las skye par) を指摘するが、文章に多少の違いが見られる。

注39 Śik.:10.12 にも同経の引用後に pūrvāvadāna の語が見られる。

注40 Cf. Sherburne 1983: 38 note 2.

注41 Tib.: pug pug por. Cf. Tib.: bu ga. Sherburne 1983: 24 は “cupped” と訳している。

注42 ŚD (Tib. D. Khi 298a2-3, 望月 1990: 5-6 note 12) はさらに「現観の三宝」をあげて、三種とする。Cf. RKU Tib. D. Ki 99b2, Mochizuki 1996: 56.

とは成就の供養 (pratipatti-puja) を示している。ここに菩薩で資糧道において規範師となった人は福德の蓄積を集めているので、供養を巧みになしている。そのことを述べようとしてから、

【普賢行】にお説きになられた七種の供養も [BPP 29-30] というのがこれである。<sup>注43</sup>「【普賢行】」とは、【聖入法界品】<sup>注44</sup>にてでている【聖普賢行願讚】<sup>注45</sup>である。「これは十方世間界の大菩薩が大きなところにおられるところの普賢の行と誓願の大海の尽きることのない蔵を得た者たちの普賢の行と普賢の誓願であるので、これは波羅蜜乗の菩薩たちの箒の灯火のようなものである」と聖なる師でる大賢者たちはお説きになられている。「お説きになられた七種の供養」とは<sup>注46</sup>ある師の口からは、

【聖普賢行願讚】に七つの供養が説かれている。すなわち、「誰であれ十方の」<sup>注47</sup>という偈により身・口・意による敬礼の供養が示されている。

注43 Cf. 『説誦と説経の前行の儀軌 (Adhyayanapustakapāṭhanapuraskriyāvidhi)』, Tib. D. No.3975 Gi 255b4-5.

注44 Gaṇḍavyūhasūtra. Skt., D.T.Suzuki and H.Izumi, The Gaṇḍavyūhasūtra. Kyoto 1934-1936, Tib. D. No. 44, P. 761, Chin. T. Nōs. 278, 279, 293. 内容に関しては、長谷岡一也「善財童子の遍歴」(『講座・大乘仏教3 華嚴思想』平楽寺書店, 1983年, 121-150)を参照。

注45【入法界品】の最後の部分である。本テキストはモンゴルでも独立したテキストとして広く伝わっていたようである。Cf. 樋口康一「蒙古語訳『普賢行願讚』の研究」(『内陸アジア言語の研究』Ⅲ, 1987): 1-32.

注46 以下の供養に関する部分は、磯田 1989 において和訳されている。同論文には文献情報などの得ることが多々あり、本稿において利用させていただいた。

注47 BCP 1: Watanabe 1912: 29, 41, Patak 1961: 4-5, 梶山 1994: 430:  
十方世界において三世に普くおられる人の獅子のそれらすべてに、私は身口意をもって敬礼いたします。

yāvata keci daśad-diśi loke sarva-triyadhva-gatā naraśiṃhāḥ /  
tān ahu vandami sarvi aśeṣāṃ kāyatu vāca manena prasannaḥ //

「普賢行を信じる」などという偈<sup>註48</sup>により貧しい身体の供養が示されている。「一つの塵の上に」という偈<sup>註49</sup>によりそれらを対象とする淨信の供養が示されている。「それらの尽きることのないマントラの海」などということにより讚嘆<sup>註50</sup>の供養が示されている。「美しい花」などということにより有上の供養が示されている。「いかなる供養であれ無上で広大な」ということにより無上<sup>註52</sup>の供養が示されている。「貧・瞋・痴」ということにより

- 注48 BCP 2: Watanabe 1912: 29, 41, Patak 1961: 4-5, 梶山 1994: 430:  
 普賢行の誓願力により、一切の勝者の現前する意と、国土の塵の数ほどの量の身体により、すべての勝者に帰依します。  
*kṣetra-rajopama-kāya-pramāṇaiḥ sarva-jināna karomi praṇāmaṃ / sarva-jinābhimukhena manena bhadra-cariipraṇidhāna-balena //*
- 注49 BCP 3: Watanabe 1912: 29, 41, Patak 1961: 4-5, 梶山 1994: 431:  
 一塵の先端にある程の多くの諸仏が仏子たちの中央にお座りなられ、法界に残るところなくすべてに勝者たちが満ちると私は信解します。  
*eka-rajāgri rajopama-buddhāṃ buddha-sutāna niṣaṅṅaku madhye / evam aśeṣata dharmata-dhātuṃ sarvādhimucyami pūrṇa jinebhiḥ //*
- 注50 BCP 4: Watanabe 1912: 29, 41, Patak 1961: 4-5, 梶山 1994: 431:  
 一切の音支をもつ海の声でそれらの尽きることのない賞賛の海とすべての勝者の功德を明らかに述べ、一切の善逝を賛えます。  
*teṣu ca akṣaya-varṇa-samudrāṃ sarva-sarvāṅga-samudra-rutebhiḥ / sarva-jināna guṇāṃ bhaṇamānas tāṃ sugatāṃ stavamī ahu sarvāṃ //*
- 注51 BCP 5-6: Watanabe 1912: 29-30, 41, Patak 1961: 4-7, 梶山 1994: 431:  
 最高の花、最高の花鬘、最勝の音楽、塗香、傘蓋、最勝の燈火、最高の練香によりそれらの勝者に供養をします。最高の衣、最勝の薫香、須弥山と同じくらしい抹香、特別に勝れたすべての莊嚴によりそれらの勝者に供養をします。  
*puṣpa-varebhi ca mālya-varebhir vādyavilepana-cchattra-varebhiḥ / dīpa-varebhi ca dhūpa-varebhiḥ pūjana teṣu jināna karomi //*  
*vastra-varebhi ca gandha-varebhiś cūrṇa-putēbhi ca meru-samebhiḥ / sarva-viśiṣṭa-viyūha-varebhiḥ pūjana teṣu jināna karomi //*
- 注52 BCP 7: Watanabe 1912: 30, 42, Patak 1961: 6-7, 梶山 1994: 431:  
 それら無上で広大な供養を一切の勝者に対するものと信解します。普賢行の信解の力によりすべての勝者に敬礼し、供養をします。  
*yā ca anuttara pūja udārā tān adhimucyami sarvājīnānāṃ / bhadra-cari-adhimukti-balena vandami pūjayamī jina sarvāṃ //*

三つの東の供養<sup>1554</sup>が示されている。他の偈頌によりそれらの供養の賞讃が示されている。

とお説きになられている。またある聖なる師の口からは、

『聖普賢行願王』に七つの供養が説かれている。すなわち次の通り、最高の花、最高の花鬘、最勝の楽器、最高の塗香、最勝の燈火、最高の練香、最高の衣とである。最勝の薫香と粉香の二つは最高の塗香と最高の練香の二つの中に含まれるものであり、「特別な莊嚴」とは前のそれらそれぞれのもと述べられていないものの莊嚴であるとされるべきである。<sup>1556</sup>

と説かれている。他の師で賢者たちは、

『聖普賢行願王』に七つの供養をお説きになられているのは、次のように七支に集まっている。<sup>1556</sup>すなわち「成就の供養である」とお説きになられ

注53 BCP 8-10: Watanabe 1912: 30, 42, Patak 1961: 6-7, 梶山 1994: 431:  
 貧・顯・痴により、また身口意により、いかなる罪を犯したにせよ、それらすべてを私は懺悔します。十方における世間の者、有学、無学、独覚、仏子、一切の勝者たちがいかなる福德を得るにせよ、それらすべてを私は随喜します。十方において世間の灯火であり、菩提と悟りを執着せずを得たこれらすべての主に無上なる輪を転じるように、私はお願いをします。

yac ca kṛtaṃ mayi pāpu bhaveyyā rāgatu dveṣatu moha-vaśena /  
 kāyatu vāca manena tathaiva taṃ pratideśayāmi ahu sarvaṃ //  
 yac ca daśad-dīśi puṇya jagasya śaikṣa-aśaikṣa-pratyekajinānāṃ /  
 buddha-sutān atha sava-jinānāṃ taṃ anumodayāmi ahu sarvaṃ //  
 yac ca daśad-dīśi loka-pradīpā bodhi vibudhya asaṅgata prāptāḥ /  
 tān ahu sarvi adhyeṣāmi nāthāṃ cakru anuttaru vartanatāyāi //

注54 磯田 1989: 562 によると、「懺悔・随喜・懇請」の三つとする。

注55 Cf. BCP 5-6.

注56 Cf. BCP 12: Watanabe 1912: 30, 42, Patak 1961: 8-9, 梶山 1994: 432:  
 帰依、供養、懺悔、随喜、勧請、懇願の私が集めてきたわずかな浄も私はすべて菩提に廻向します。

vandana-pūjana-deśanatāya modanādhyeṣaṇa-yācanatāya /  
 yac ca śubhaṃ mayi saṃcitu kiṃcid bodhayi nāmayāmi ahu  
 sarvaṃ //

ており、その同じものにそれら七つが完成した後に、次のように「過去の  
 仏たちと現在の十方におられる〔諸仏に〕<sup>注57</sup> 供養をなさい」と供養たるも  
 のを明らかにお説きになられている。

と説かれている。これらはどれにも矛盾はなく、自分自身が信解するものを取  
 るべきである。

次のように供養は二種である。すなわち財物の供養と成就の供養である。

財物の供養は二つである。すなわち直接知覚できるものと、意により作られ  
 るたのとである。

直接知覚できるものには、二つである。〔最初のもの〕花など、香など、  
 音楽など、国政、宝などといった自分自身にあるもの。二つ目は、心に依存す  
 るものをもったものと、男の子と女の子や、妻や、召使いなどである。

意により作られたものは、二つである。最初のは、十方世界の主人がお  
 らず、他者が<sup>注59</sup> 摂受していない<sup>注60</sup> 卓越したものとすべてである。次のように、『宝雲  
 経』<sup>注60</sup>、『<sup>注61</sup> 聖統鬘タントラ』、『<sup>注62</sup> 禪定輪供養手印経』、『<sup>注63</sup> 方広総持宝光明経』、『菩

注57 BCP 13: Watanabe 1912: 30, 42, Patak 1961: 8-9, 梶山 1994: 432:

過去の仏たちと現在の十方におられる〔仏たち〕が供養されますように。また未  
 来の〔仏たち〕も速やかに願いをかなえて菩提を悟りますように。

pūjita bhontu attaka buddhā ye ca dhriyanti daśad-diśi loke /  
 ye ca anāgata te laghu bhontu pūrṇa-manoratha bodhi-vibuddhāḥ //

注58 Cf. Eimer 1978: 168-169.

注59 磯田 1989 注17 には「三輪清浄を指す」とあり、Śik に引用される『宝雲経』の  
 “amamaṅyaparigrahāṇi” が指摘されている。

注60 Ratnameghasūtra. Tib. D. No. 231, P. No. 897, Chin. T. Nos 489,  
 658, 659, 660.

注61 Sandhimālā-mahātantrabodhisattva-mahāviniścaya-nirdeśān mahā-  
 maṅiratna-kausalya-nirdeśa-mahāpariṇāma-nāma-rājā. Tib. D. No. 809,  
 P. No. 432.

注62 Samādhicakrasūtra. Tib. D. No. 241, P. No. 907.

注63 Ratnolkadhāraṅṣisūtra. Tib. D. Nos. 145, 847, P. No.472, Chin. T.  
 No. 299.

提行論<sup>注64</sup>に説かれている通りである。二つ目は意の変幻より生じた宝であり、『虚空蔵経』<sup>注65</sup>に出ている。すなわち次の通り転輪王の統治した七宝と、宝石、<sup>注66</sup>金、銀、螺貝、水晶、ムーンストーン、猫目石、緑玉、真珠、赤真珠、碧玉、ルビー、ダイヤモンド、<sup>注67</sup>車渠 (musāra-galva)、赤琥珀、サファイヤ、エメラルド、<sup>注68</sup>ラピスラズリ、<sup>注69</sup>貝殻石、珊瑚、猫睛石 (karketana)、大猫睛石などのそれら宝石の雨が降ることと、それらの傘、宝幢、旗、無量宮、言うこともできない格子と、さらに『方広総持宝光明经』に出ている通りである。すなわち、

たくさんの花、花の天蓋、花飾りの光を放ち、種々なる花をあまねくまき散らし、それら大我を勝者が供養する。<sup>注70</sup>

と説かれている。同じように香、焼香、花鬘、粉香、衣服、宝、蓮華、真珠の首飾り (hāra)、宝幢であり、それらも種々なる色をもっている。前の偈頌により結び付けられるべきである。同じように、巧みに作られ、宝石からできた柄があり、種々なる色をした、すべての仏国土を覆う、言うこともできない傘

注64 Bodhicaryāvatāra. Skt. Poussin 1901, Tib. D. No. 3871, P. 5272.

注65 Gaganagañjaparipṛcchāsūtra. Tib. D. No. 148, P. 815, Chin. T. No. 404.

注66 Cf. 定方晟「七宝について」(『印度学仏教学研究』24-1, 84-91).

注67 Tib.: a sma garbha. Skt. "asamagarbha" (等しくないものを内包するもの)か。磯田 1989: 564 は「エメラルド」、Sherburne 1983: 28 は "diamond" とする。

注68 磯田 1989: 564 は "Mar-kata (sic)" とチベット語をそのまま記しているが、"marakata" のことである。

注69 Vaidūrya に関しては、桑山正進編『慧超往五天竺國傳研究』京都大学人文科学研究所 1992: 79-80 所収の定金計次の解説を参照のこと。Cf. 大谷正幸「りりとそらとほとけ 群青と金色のイメージ」(『仏教学論集』21: 1-20)。

注70 Ratnolkadhāraṇīsūtra: Tib. P. No. 472, 'A 39b1-2. Chin. T. No. 299, 898b. Cf. 磯田 1989: note 24.

蓋と、同じように宝幢もそれと同様で、すべては傘蓋の通りである。旗と勝者の旗も大きさ・素材・畳は前の通りである。さらにまた、色も形も香りも完全な花の雨、その花鬘、その傘蓋、その宝幢、その旗、勝者の旗、言うこともできないほどたくさんの種々なる無量宮、灯火もそのような在り方であり、焼香の雨なども前の在り方を備えており、完全な色と香りと味の供養する食物や飲物と、甘美な香りのする衣服で、奏でられる音楽を聞くと心が奪われる琵琶、笛、鼓、小鼓、大鼓、円鼓、杖鼓、法螺貝、喇叭、はち、鏡、ダマル太鼓、天と人の熱狂的な歌、三宝の礼讃の歌曲を聞き、有意義なものとし、十億の須弥山を粉にしたものを集めただけのものなどである。それも『聖宝雲経』<sup>註71</sup>に出ている通りである。

成就の供養は二つである。<sup>註72</sup>すなわち成就の供養自身と無上の供養である。最初のものに七つある。すなわち「帰依の供養と、財物を供える供養と、罪を懺悔する供養と、随喜の供養と、同じように勧請と、お願いをすることと、廻向の供養」<sup>註73</sup>というものである。

そのうち帰依の供養にも二つある。すなわち、身体の供養と、口の供養とである。

身体の供養は『聖普賢行讚』のうち、「誰であれ」<sup>註74</sup>などというものと、「普賢行を信じる力により」<sup>註75</sup>などというものと、「一つの塵の上にある塵」<sup>註76</sup>などとい

注71 Ratnameghasūtra. Tib. D. No. 231, P. No. 897, Chin. T. Nos. 489, 658, 659, 660.

注72 Cf. Eimer 1978: 169-170.

注73 白寄 1990: 38-53 これらの七支に関しては、アティーシャのテキストに多く見られる。Cf. Gurukriyākrama, Tib. D. No. 3977, Gi 256b4-5, Vimalaratnalekha, Dietz 1984: 314-315 Anm. 30.

注74 BCP 1. 前注 47参照。

注75 BCP 2. 前注 48参照。

注76 BCP 3. 前注 49参照。

うものである。それらにより認識の対象とされるべきものと、身体を与えることと、帰依をなすそのことが説かれている。この同じ意味が『<sup>註77</sup>聖三蘊經』に説かれている。すなわち、

彼が右膝を地面につけたとき、

というのと、

彼が左膝を地面につけたとき、

というのと、

彼が右手を地面につけたとき、右の方の一切の衆生が道に住するようにと発心した。

というのと、同じように、

左手と頭を地面につけたとき、

という在り方が同じように知られるべきである。その廻向は同じ經典に次の通り、

私の五肢によるこの帰依により、一切衆生の五障が取り除かれるように。五眼が清浄となるように。五根が完全でありますように。五道に住するように。損なわれていない五明智を得ますように。五趣に生まれた衆生たちはその五趣より勝れたもの、戒が勝れたもの、三昧が勝れたもの、知恵が勝れたもの、解脱が勝れたもの、解脱の智見が勝れたものを得るように。仏を見、法を聞き、僧と一緒にすることを得るように。<sup>註78</sup>

と説かれている如くである。

口による供養も、身体による帰依をなしたその同じ時の儀軌を知る何れかのものがあるので、三宝を讃嘆する歌曲により言葉を述べ、敬礼することである。

注77 Triskandhakasūtra. Tib. D. No. 284, P. No.950. 以下の引用は Tib. P. 'U 76b6-77a4.

注78 Triskandhakasūtra. Tib. P. No. 950 'U 77a5-8.

財物の供養は前にすでに説いた。

罪を懺悔する供養は、『金光明經』<sup>注79</sup>、『過犯儀軌』<sup>注80</sup>、『三蘊經』、『淨業障經』<sup>注81</sup>など〔に説かれている〕。その罪の懺悔も供養と同じものである。すなわち、次のように『聖無尽懺經』に、

自分と他者の罪の懺悔も福德になる。

と説かれている。

隨喜の供養も『聖月燈三昧經』<sup>注84</sup>にでている通りである。すなわち、供養と同じである。

勧請とお願いをすることの供養と、廻向の供養となる在り方も經典自身を見るべきである。

無上の供養に二つある。すなわち、対象をもつものと、対象がないものである。

そのうち、対象をもつものは、『聖海懺所問經』に、

注79 Suvarāprabhāsottamasūtra. Skt. Nobel 1937, Tib. D. No. 556, P. No. 175, Nobel 1944. Chin. T. Nos. 663, 664, 665.

注80 Āpattideśanāvidhi. Tib. D. No. 3973, P. No. 5368 or D. No. 3974, P. No. 5369. 前者の著者は Devaśānti であり、後者の著者は Dipaṃkaraśrījñāna 自身である。ここでは後者を指すと思われるが、後者の著者は前者の翻訳著でもあり、内容の比較検討を要する。

注81 Karmāvaraṇapratiprasrabdhisūtra. Tib. D. No. 219, P. No. 885, Chin. T. No. 1493, またアティーシャには Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya (Tib. D. No. 4007, P. No. Ki 5508) というテキストがある。

注82 同じ表現は RKU Tib. D. Ki99a6 にも見える。Cf. Mochizuki 1996: 55.

注83 Akṣayamatinirdeśasūtra. Tib. D. No.89, P. No. 760 (44), Chin. T. No.403. Braarvig 1993 vol.1: 119, vol.2: 456.

Śik: 291.8 [Tib. P. Ki 186a7, Cf, Eimer 1978: 176]:

ātma-para-pāpadeśanā puṇyasam̐bhāre paṭhyate /

注84 Samādhiraśasūtra Chap. XXV: anumodanāparivarta. Cf. P. L. Vaidya ed., Samādhiraśasūtra. Buddhist Sanskrit Texts No. 2. Darbhanga 1961: 155-157.

海慧よ、これら三つは如来に対する無上の供養と尊敬をなすことである。三とは何かといえ、菩提に発心することと、正法を保つことと、衆生に慈悲を起こすことである。<sup>注85</sup>

と説かれている。そのように、『漸次出生経』に、

賢者よ、これら四つの利益を見る菩薩は如来に供養をなしているのである。四つとは何かと言え、最高の施住を信じるようになることと、自らを見て、他の衆生にも供養しようとする事と、如来に供養をしてから菩提心が堅固になるであろうことと、大士の三十二の特徴を見てから善根が集められるであろうことと、これら四つである。<sup>注86</sup>

と説かれている。衆生たちを喜ばせることも、如来に対する無上の供養である。すなわち、世尊が『塩水の河の経』<sup>注87</sup>にそのようにお説きになられており、規範師シャーンティデーヴァも【『集学論』に】、

注85 Sāgaramatipariṣcchāsūtra. Tib. D. No. 152, P. No. 819, Chin. T. No. 400. Śik: 313.6-8:

trīṇimāni sāgaramate tathāgatasya niruttarāṇi pūjopasthānāni /  
katamāni trīṇi / yac ca bodhicittam utpādayati / yac ca saddharmaṃ  
pariṅghṇāti / yac ca sattveṣu mahākaruṇā-cittam utpādayati /

注86 Anupūrvasamudgatasūtra. テキストのアイデンティファイはできていないが、Śik に同じ引用が見られる。Śik: 313.1-5:

catura imān bhadrānuśaṃsān paśyan bodhisattvas tathāgata-pūjāyām  
utsuko bhavati / katamāṃś caturaḥ / agras ca me dakṣiṇīyaḥ pñjito  
bhaviṣyati māṃ ca drṣtvā 'nye 'pi tathā śikṣiṣyanti / tathāgataṃ ca  
pūjayitvā bodhicittam dṛḍham bhaviṣyati / dvātrimṣatām ca mahā-  
puruṣa-lakṣaṇānām saṃmukha-darśanena kuśala-mūlam upacittam  
bhaviṣyati / imāścatvāraḥ /

注87 Tib.: Ba tshwa'i chu klung gi mdo. テキストの確認はできていないが、RKU: Tib. D. Ki 108a6 では「Nāgārjuna により『Ba tshwa'i chu klung gi mdo』から生じた『有情了悦讚 (Sattvārādhanaṣṭava. Tib. D. No. 1125, P. No.2017)』という句が見られ、RKU: Tib. D. Ki 106b7-107a1 に引用される偈頌は Nāgārjuna のそのテキストにほぼ一致する。

誰であれ楽しんでいれば、ムニはお喜びになり、誰であれ害されていれば、ムニはお喜びになれない。彼らが喜ぶことにより、ムニはお喜びになられ、彼らを害することにより、ムニを害することになる。<sup>188</sup>

と述べ、また同じものに、

如来を喜ばせるために、世間の召使いとして奉仕しましょう。人の集まりが、私の頭の上に足を置いても、殺してもかまわない。世間主を喜ばせるなら、慈悲をお持ちの方たちがこのすべての世界を自分のものになさっても、これに疑いはない。これら物質として現れたすべての衆生が主に他ならないし、どうして尊敬しないのであろうか。如来を喜ばせることもそれと同じである。<sup>189</sup>

と述べ、また同じものに、

慈悲の意樂をもって供養をすること、それが衆生の偉大性である。仏を信じる福德、それが仏の偉大性である。<sup>190</sup>

注88 Śik: 156.1-2 (Tib. P. Ki 103b2-3, Bendall 1981: 154):

yeṣāṃ sukhe yānti mudam munīndrāḥ yeṣāṃ vyathāyāṃ praviśanti  
manyam /  
tattoṣaṇāt sarva-munīndra-tuṣṭis tatrāpakāre 'pakṛtaṃ manīnām //

Cf. BCA VI 122.

注89 Śik: 156.7-11 (Tib. P. Ki 103b5-7, Bendall 1981: 155):

ārādhānāyās ca tathāgatānāṃ sarvātmanā dāsyamupaimi loke /  
kurvantu me mūrhdni padaṃ janaudhā nighnantu vā tuṣyantu lokan  
ātaḥ //  
ātmi kṛtaṃ sarvam idaṃ jagattaiḥ kṛpātmabhir naiva hi saṃśayo  
'tra /  
dṛśyanta ete nanu sattva-rūpās / ta eva nāthāḥ kimanādaro 'tra //  
tathāgatārādhānam etad eva svārthasya saṃśādhanam etad eva /

Cf. BCA VI 119cd125.

注90 Śik: 157.7-8 (Tib. P. Ki 104a5-7, Bendall 1981: 155):

mairāsayaś ca yat pūjyaḥ sattvamāhātmyam eva tat /  
buddha-prasādādyat puṇyaṃ buddha-māhātmyam eva tat //

Cf. BCA VI 115.

と『集学論』にお説きになられている。『入菩提行論』にも、

衆生を喜ばせること以外に、仏を喜ばせる方法は他にない。<sup>注91</sup>

と説かれており、また同じものにこの意味が詳しく説明されており、それ自身を見るべきである。さらにまた、經典自身において詳しいので、經典自身を見るべきである。

そして対象がない供養は、完全なる智慧の修習である。そこには、供養されるべき者と、供養をなす者と、供養の物は存在しない。それはまた、『[金剛]般若経』に、

私を物質的ものとして見たり、私を声で認識するそれらの人は誤って見  
ており、この人は私を見ていないのである。

諸仏は法身であり、導く人たちは法性と見られる。法性は見られるべき  
ものではないので、それを認識することはできない。<sup>注92</sup>

とお説きになられている。この意味は「聖常啼品」<sup>注93</sup>に明らかにお説きになら  
れているので、それを見るべきである。それ故に『聖獅子吼経』に、

仏を想って仏を見ることがなければ、仏を供養することは言うまでもな  
いことであり、それは本質がないものである。また仏を供養することは何  
かといえば、何であれ想の特徴を起こさないことである。どこにおいても  
心がなく、心所がなく、仏を想うことがなく、法を想うことがなく、僧を

注91 BCA VI 119cd: Minayev 1889: 186, Poussin 1901: 234 [Cf. Weller 1950: 41]:

kiṃ ca niśchad bhabandhūnāmaprameyopakāriṇāṃ /  
sattvārādhābam utsrjya niṣkṛtiḥ kā parā bhavet //

Cf. Poussin 1907: 67, 金倉 1965: 100, Pezzali 1982: 131, Gnoli 1983: 476, Steinkellner 1989: 77, Crosby 1996: 61.

注92 Vajracchedikā-prajñāpāramitāsūtra. Conze 1957: 56-57, 89, 長尾 1973: 62.

注93 Sadāpraruditaparivarta. Aṣṭasahasrikā-prajñāpāramitāsūtra Chap. 30. Cf. Wogihara 1973: 927-962.

想うことがなく、人や我や他者を想うことがないことが、如来に対する供養である。<sup>注94</sup>

とお説きになられており、この意味は詳しくは經典自身を見るべきである。それ故に聖アサンガは、

その仏世尊は成就の供養により喜ばれるが、財物の供養によっては彼はお喜びにならないだろう。<sup>注95</sup>

とお説きになられているものも、よく導くものとなろう。それ故に仏は法身として存在している。すなわち『仏華嚴経』の偈頌に、

諸仏は法身であり、如来で、生じることがなく、清浄で、虚空の如きである。<sup>注96</sup>

とお説きになられており、『聖虚空藏経』にも、

仏・世尊が法性としても知覚できないのならば、物質的のものや、特徴として見る対象がどこにあるか。<sup>注97</sup>

とお説きになられている。規範師である聖ナーガールジュナも〔『勝義讚』に〕、

諸法はすべて〔自性を〕欠いており、誰を讚嘆し、誰が讚嘆するであろうか。生・滅が捨てられ、極端と中間もなく、所取・能取は存在しないことに、汝が讚嘆できる何らかのものがある。<sup>注98</sup>

注94 *Siṃhanādasūtra*. Tib. D. No. 67, 103b1-104a6, P. No. 760 (23), Zi 98b7-99b7.

注95 典拠の確認はできていない。磯田 1989: 注42参照。

注96 *Buddhāvataṃsakasūtra*. Tib. D. No. 44, P. 761, Chin. T. Nos. 278, 279, 293.

注97 *Gaganagañjasūtra*. Tib. D. No. 148, P. No. 815, Chin. T. No. 404. 引用箇所の確認はできていない。

注98 Tucci 1932: 324;

śūnyeṣu sarvadharmeṣu kaḥ vā stutaḥ // 9

kastvāṃ śaknoti samstotumutpādayayavarījitam /

yasya nānto na madhyaṃ vā grāho grāhyaṃ na vidyate // 10

とお説きになられている。そのような供養の区別は、菩薩の能力の鈍・鋭の区別により、それぞれ知るべきである。

根本[偈]に入るべきである。すなわち、

菩提座に至るまでの不退転の心により [BPP31-32]

などという中、「菩提座<sup>注99</sup>」とは未了義における吉祥なる金剛座である大菩提の場所であり、有頂の吉祥なる場所である色究竟である。それらにおいて金剛のような三昧を得るので「座」である。了義においては、その三昧を得る場所はこれであるとするのではない。何故ならば勝義において一切の法界たるものであるから。『聖虚空藏経』に、

菩提座は虚空である。すなわち、菩提は虚空の特徴である。<sup>注100</sup>

とお説きになられている。「不退転の心により」とは、ここにおいて不退転の菩薩は三種である。すなわち、行道より退かないことと、真実を見ることから退かないことと、第八地から退かないことである。この意味は『聖般若波羅蜜注解現觀莊嚴論<sup>注101</sup>』を詳しくみるべきである。

さらにまた、それぞれの人から退かないことと、真実を見ることから退かないことと、第七地より退かないことである。この意味は吉祥なる規範師ジュニャーナキールティが著しになった『入真実論<sup>注102</sup>』がとても明確になしたそこを見るべきである。

---

Cf. Poussin 1913: 17-18, Silburn 1977: 203, Lindtner 1991: 98, Gnoli 1992: 118.

注99 Cf. Eimer 1978: 25.

注100 Gaganagañjasūtra. Tib. D. No. 148, P. No. 815, Chin. T. No. 404.

引用箇所の確認はできていない。

注101 Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitopadeśaśāstra. Skt. Stcherbatsky 1977, Tib. D. No. 3786, P. No. 5184. Cf. Conze 1954.

注102 Tib. P. No. 4532: Tattvāvatārākhyā-sakala-sugata-vacas-tātparyavyākhyā-prakaraṇa.

また不退転に四つある。すなわち、発心より退かないことと、秘密であるものから退かないことと、忍を得ることから退かないことと、[…から退かないことと]<sup>注103</sup>である。

最初に帰依を三度なすべきである。[BPP 36]

とは、三宝のそれぞれに対して三回なすべきである。帰依の意味をまとめてから述べられる。すなわち、

場所、依るべきもの、想、時、学ぶべきこと、本質、特徴、方法、行為、  
 区別、語義解釈、喩例、過失、必要性、功德である。<sup>注104</sup>

ここに、帰依の在り方が述べられるべきである。すなわち、ある人が輪廻の苦しみから出離し、常に死を思いだし、本質による慈悲と大智があり<sup>注105</sup>、七つの別解脱のうち適切な戒に過失なく住しているその人が、もし在家であるのならば、信者の学ぶべきである五つの基本的な学ぶべきこととそれに属する四十五の学ぶべきことを備えることとであり、彼が出家した人であるのならば、自らの学ぶべきものの在り方と、『声聞地』に解説されている通りの沙門の莊嚴<sup>注106</sup>、浄化の功德、さらに四つの依るべきもの、四つの在り方など、さらに儀軌、行道、生活、戒、見解の完全なものをもつこと、さらにまた夜の早い時と遅いときに眠らずにヨーガに励むこと<sup>注107</sup>、食事の量を知ること<sup>注108</sup>、諸根の門を制限することで

注103 四つのうちの一つがテキストには欠けている。

注104 ŚD Tib. Khi 297b7-298a1 (望月 1900: 4-5). ただし ŚD には順序の若干の相違がある。帰依に関する記述の分析からも、これが ŚD からの引用として著述の前後関係を決定するには注意を要するであろう。

注105 Cf. BĀMA, Tib. D. No. 6952, khi 296a2-3. 以下の文章には、BĀMA との平行句が多く見られる。

注106 Cf. ŚBh, 声聞地(10).

注107 Cf. ŚBh, 声聞地(1): 24-25, 声聞地(6): III-7.

注108 Cf. ŚBh, 声聞地(1): 24-25.

ある。僅かな罪さえも恐れて見ている人は次のように多く、

この別解脱戒だけにより自分と他者のために究竟に至ることがないのならば、どのように自分と他者のために究竟に至るであろうか。次のように、「大乘と言われるものは自分と他者のために究竟に至ることとして存在する」と知られており、聖なる善友の一人から得るべきである。

と想ってから師として適切なその聖者を長い間喜ばせるべきである。すなわち、彼がお喜びになられた後、彼の二本の足元に頭をつけ、次のように、

聖なる人であるあなたは、私に慈愛をなして下さい。私に自分と他者のために究竟に至る方法である大乘の道をお与え下さい。

と虚偽を離れた心によりたずねるべきである。

それからその善友により彼の弟子は三つの考察により考察されている。すなわち次のように、行道と、夢と、世間・出世間の天の印を与えることにより考察され、彼が〔大乘の〕器にいるのを知ってから、その師は喜び、微笑み、財物や得たものや賞賛を離れた心とその弟子に対する慈悲の心とにより罪のある人から離れた地方において地面をよく固め、その清浄なところにおいて牛の五つの相により粘土と軟膏を作り、檀香などの特別な香も塗り、そこに妙香の花弁をまくべきである。そこに三宝の影像を形どったものなどやポティなどや菩薩たちが座席や台座にお座りになるようにすべきである。そこに天蓋などや、花などの供養の道具をそのまま準備し、楽器の特別なものや、食物や、装飾品などの準備に入り、それからその弟子が床が花で飾られている座に善友がお座りになるようにたずねて、次のように「この方はすべての有情の救護者で守護者である」と考えて、師に対して教師の思いが起こされ、沐浴をなして、清浄な服を着て、よい想をもつことにより、次のように、

注109 Cf. ŚBh, 声聞地(3): 12-13.

注110 Cf. BĀMA, Tib. D. No. 6952, Khi 296a6-7.

善男子よ、あなたは知って下さい。私はこの輪廻の場所において無始の時より多くの苦しみにより傷つけられ、苦しめられていました。主もなく、救護者もなく、守護者もいませんでした。私の主で、救護者で、守護者となって下さい。

と三度述べるべきである。それからその師は、次のように、

人よ、あなたは輪廻に疲れており、落胆しているので、大きな車の道に入ろうとすることはとても良いことである。次のように知りなさい。「三宝」というものは主がなく、救護者がなく、守護者がいない者たちの主で、救護者で、守護者となるものとして存在する。あなたは清浄な意と、とても広がった意により極端な有情を対象として、それから帰依をしなさい。そして尊敬や敬愛を在り方の通りになすために、何であれ供養の道具を集めなさい。

と述べるべきである。それからその弟子が両方の膝を地面に着けて、掌を合わせてから、花を与えて、次のように、

最高の人よ、憶えて下さい。無始以来これまで私は輪廻を転じておりません。苦しみにより疲れはてています。何であれ苦しみのおわりを生み出すその道を、あなたは私に示して下さい。

と三度述べるべきである。それからその師は十方の世間界の三宝をすべて対象として、言うこともできない身体の莊嚴を望み、それぞれの身体に言うこともできないほどの頭を、それぞれの頭に言うこともできないほどの舌を望む<sup>註111</sup>。すなわち前に述べた身体と口の供養と、財物の広大な供養と、懺悔と随喜と勧請と懇願と廻向との「七種の供養である」と言われるものであり、その七つの供養に従って帰依をなすべきである。

そのように、その帰依をなすことにより、帰依の学ぶべきことを守るべきで

---

注111 Cf. BĀMA, Tib. D. No. 6952, Khi 296b3-4,

ある。すなわち、他の天には帰依をせず、他を害したり傷つけることを捨て、外道を支持せず、彼らを敬愛せず、三宝の特殊性と功德を憶えることにより何度も帰依をなし、大きな感謝を憶えていることにより常に供養に努め、食物や飲物の献上し、大悲を憶えていることにより他の有情もこの在り方のように設定し、なすべきことをなし、必要なものがあるならば、三宝に供養をしてから報告をし、世間における他の方法は捨てられる。

功德は三つ得られる。次のように、原因の時と、過程の時と、結果の時とである。<sup>注112</sup>最初のものは、この世代と他の功德であって、[詳しくは]師から聞くべきである。そのように帰依の功德を知ったその人は、昼に三度、夜に三度帰依をなすべきで、<sup>注113</sup>三宝さえも笑うためや命のために捨てることなく守るべきである。

## 参考文献と略号

- AKBh      Abhidharmakośabhāṣya. P. Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Tibetan Sanskrit Works Series vol. 8. Patna.
- BĀMA      Bodhisattvādikarmikamārgāvatāradeśanā (Byang chub sems dpa' las dang po pa'i lam la 'jug pa bstan pa). Tib. D.

注112 ŚD Tib. D. Khi 299a1-4, 望月 1990: 9-10. 同論により補うと、「原因の功德」とは、この世と他の世であり、前者に関しては、八大恐怖から解放されること、無間断であること、教えに対して喜ぶ天たちが保護する助力をなすこと、死ぬ際に歓喜することである。「過程の功德」は、四聖諦と八正道と七菩提分などを修習することである。「結果の功德」は、有余と無余の二つの涅槃と三身とを得ることである。

注113 RKU には「昼に三度、夜に三度七支の供養をし」とある (RKU Tib. D. Ki 99a4, Mochizuki 1996:55 note 14a. Cf. Vimalararatnalekha [35], Dietz 1984: 314-315 Anm. 31)。また BCA VI. 98 には「昼に三度、夜に三度三束をなすべきである」とある。プラジュナーカラマティの注釈により補うと、この三束は「懺悔・随喜・廻向」である (Poussin 1901: 152 [Tib. D. La 105b5]: triyāṇāṃ skandhānāṃ pāpadeśanā-puṇyānumodanā-pariṇāmanānām)。

- Nos. 3952, 4477, P, Nos. 5349, 5390.
- BCA Bodhicaryāvatāra. See Minayev 1889.
- BCP Badracariprañidhānarāja. See Watanabe 1912, Pathak 1961.
- Bendall 1981 Cecil Bendall and W. H. D. Rouse, *Śikṣa Samuccaya*. repr. Delhi.
- BMDP Bodhimārgadipañjikā (Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel). Tib. D. No. 3948, P. No. 5344.
- BPP Bodhipathapradīpa (Byang chub lam gyi sgron ma). Tib. D. No. 3947, 4465, P. No. 5343, 5378. See Eimer 1978.
- Braarvig 1993 Jens Braarvig, *Akṣayamatīnirdeśasūtra*. 2 vols. Oslo.
- Chattopadhyaya 1967 Alaka Chattopadhyaya, Atiśa and Tibet. Calcutta.
- Conze 1954 Edward Conze, *Abhisamayālaṅkāra*. Serie Orientale Roma VI. Roma.
- Conze 1957 Id., *Vajracchedikā Prajñāpāramitā*. Serie Orientale Roma VIII. Roma.
- Crosby 1996 Kate Crosby and Andrew Skilton, *Śāntideva: The Bodhicaryāvatāra*. Oxford.
- Dietz 1984 Siglinde Dietz, *Die buddhistische Briefliteratur Indiens*. Asiatische Forschungen Band 84. Wiesbaden.
- Eimer 1978 Helmut Eimer, *Berichte über das Leben des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. Asiatische Forschungen Band 51. Wiesbaden.
- Eimer 1978 Id., *Bodhipathapradīpa. Ein Lehrgedicht des Atiśa in der tibetischen Überlieferung*. Asiatische Forschungen Band 59. Wiesbaden.
- Eimer 1979 Id., *Rnam thar rgyas pa. Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. Asiatische Forschungen Band 67. 2 Teile. Wiesbaden.
- Eimer 1981 Id., Suvarṇadvīpa's "Commentaries" on the Bodhicaryāvatāra. *Studien zum Jainismus und Buddhismus*. Wiesbaden. 73-78.
- Eimer 1985 Id., On Atiśa's Bodhipathapradīpa. *Bulletin of Tibetology*. 1, 15-18.
- Eimer 1986 Id., Again: On Atiśa's Bodhipathapradīpa. *Bulletin of Tibetology*. 2, 5-15.
- Gnoli 1983 Raniero Gnoli, *Testi Buddhisti*. Torino.

- Gnoli 1992 Raniero Gnoli, *Nāgārjuna: Lo sterminio Degli errori*. Milano.
- Guenther 1986 Herbert V. Guenther, *The Jewel Ornament of Liberation*. repr. Bso-ton & London.
- 袴谷 1989 袴谷憲昭「チベットにおけるインド仏教の継承」【岩波講座東洋思想第11巻 チベット仏教】岩波書店, 119-151.
- 羽田野 1987 羽田野伯猷「チベット・インド学集成 第一巻 チベット篇Ⅰ」法蔵館。
- 磯田 1989 磯田熙文「pūja について」【藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教】平楽寺書店, 555-576。
- 梶山 1994 梶山雄一監修「さとりにへの遍歴 下 華嚴經入法界品」中央公論社。
- 金倉 1965 金倉圓照「悟りへの道」サーラ叢書 9 平楽寺書店。
- Kelsang 1991 ツルティム・ケサン/小谷信千代【仏教瑜伽行思想の研究】文栄堂。
- Lévi 1983 Sylvain Lévi, *Mahāyāna-sūtrālaṅkāra*. 2 vols. repr. 臨川書店。
- Lindtner 1991 Christian Lindtner. *Nagarjuna: Jewelkæden og andre skrifter*. København.
- LRC Byang chub lam rim chen mo las rgyal sras kyi spyod pa spyi la bslab pa'i lam yan la. Ngawang Gelek Demo ed., *The Collected Works (Gsuñ 'bum) of rJe Tsoñ-kha-pa blo-bzan-grags-pa*. New Delhi 1977.
- 御牧 1996 御牧克巳・森山清徹・苦米地等流訳【大乘仏典〈中国・日本篇〉15 ツォンカバ】中央公論社。
- Minayev 1889 I. P. Minayev, Bodhicaryāvatāra, *Zapiski Vostochnaga Otdeleniya Imperator skago Russkago Arkheologischeskago Obshchestva*, vol. IV, 153-228.
- Mochizuki 1988 Kaie Mochizuki, Seeking Refuge in the Three Treasures in the Bodhipathapradīpa, 11.25-36: From the Bodhimārgadīpa-pañjikā. 【印度学仏教学研究】37-1, (38)-(40).
- 望月 1990 望月海慧【『娑婆の説示』試訳】【仏教学論集】19, 1-20.
- Mochizuki 1996 Id., Der Bodhicitta-Abschnitt in Atiśas Ratnakaraṅdoghāṭa. 【勝呂信静博士古希記念論文集】山喜房, 51-85.
- MSA Mahāyāna-sūtrālaṅkāra. See Lévi 1983.
- 長尾 1954 長尾雅人【西蔵仏教研究】岩波書店。
- 長尾 1973 Id., 「金剛般若経」【大乘仏典1 般若部経典】中央公論社。
- Nobel 1937 Johannes Nobel, *Swarnaṇprabhāsottamasūtra. Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Nach den Handschriften und mit Hilfe der tibetischen und chinesisichen*

Übrsetzungen. Leipzig.

- Nobel 1944 Id., *Svarṇaprabhāsottamasūtra. Das Goldglanz-sūtra. Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus. Die tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch.* Leiden-Stuttgart.
- Pāsādika 1989 Bhikkhu Pāsādika, *Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu.* Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden. Beiheft 1. Göttingen.
- Pathak 1961 Sunitikumar Pathak, *Śrī Āryabhadracariprañidhānarāja: with Introduction and Notes.* Gangtok.
- Pezzali 1982 Amalia Pezzali, *Śāntideva e il Bodhicaryāvatāja.* Bologna.
- Poussin 1901 Louis de la Vallée Poussin, *Bodhicaryāvatārapañjikā, Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva.* Bibliotheca Indica Nos. 983, 1031, 1090, 1126, 1139, 1305, 1399. Calcutta 1901-1914.
- Poussin 1907 Id., *Bodhicaryāvatāra, Introduction a la pratique des futurs Bouddhas, poème de Śāntideva.* Paris.
- Poussin 1913 Id., Les quatre odes de Nāgārjuna. *Le Muséeon.* 1-18.
- Poussin 1980 Id., *L'Abhidharmakośa de Vasubandhu.* Mélanges Chinois et Bouddhiques vol. X VI. 5 vols. repr., Bruxelles.
- RKU Ratnakaraṇḍodghāṭa-nāma-madhyamakopadeśa (dBu ma'i man ngag rin po che'i za ma tog kha phye ba zhes bya ba). Tib. D. No.3930, P. No.5325.
- Roerich 1979 George N. Roerich, *The Blue Annals.* repr. Delhi.
- Sarkar 1986 H. B. Sarkar, A Note on Atiśa Dīpaṅkara, Dharmakīrti and the Geographical Personality of Suvarṇadvīpa. *Bulletin of Tibetology* 3,36-41.
- ŚBh Śrāvaka bhūmi. See 声聞地(1)-.
- ŚD Śaraṇagamanadeśanā (sKyabs su 'gro ba bstan pa). Tib. D. No.3953, 4478. P. 5350, 5391. Cf. 望月 1990.
- Sherburne 1983 Richard Sherburne, S.J., *A Lamp for the Path and Commentary.* London.
- 声聞地(1) 高橋尚夫・松濤泰雄・勝部隆敏「梵文声聞地」『大正大学総合佛教研究所年報』3, 1981. (1)-(44).
- 声聞地(3) 声聞地研究会「梵文声聞地」『大正大学総合佛教研究所年報』6, 1984.

(1)-(30).

- 声聞地(6) 声聞地研究会「梵文声聞地(六)」『大正大学総合佛教研究所年報』9, 1987. (86)-(139).
- 声聞地(10) 声聞地研究会「梵文声聞地(十)」『大正大学総合佛教研究所年報』13, 1991. (1)-(45).
- 白寄 1990 白寄顕成「Jitāri の Bodhicittotpādasamādhānaviddhi 研究(1)」『神戸女子大学紀要』23-1, 36-55.
- Śik. Śikṣāsamuccaya. Cecil Bendall ed., *Çikṣhāsamuccaya*. Bibliotheca Buddhica I, repr. Tokyo 1977.
- Silburn 1977 Lilian Silburn, *Le Bouddhisme*. Paris.
- Stcherbatsky 1977 Th. Stcherbatsky and E. Obermiller, *Abhisamayālaṅkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-śāstra*. repr. Tokyo.
- Steinkellner 1989 Ernst Steinkellner, *Śāntideva: Eintritt in das Leben zur Erleuchtung*. 2. Auflage. München.
- Thurman 1979 Robert A. F. Thurman, *Maitreya-nārha's Ornament of the Scriptures of the Universal Vehicle*. American Institute of Buddhist Studies.
- 塚本 1990 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著『梵語仏典の研究Ⅲ 論書篇』平楽寺書店。
- Tucci 1932 Giuseppe Tucci, Two Hymns of the Catuḥ-stava of Nāgārjuna. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1932, 309-325.
- 宇井 1961 宇井伯寿『大乘莊嚴經論研究』岩波書店。
- 山口 1955 山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館。
- 山口 1973 山口益『山口益仏教学文集 下』春秋社。
- 山口 1988 山口瑞鳳『チベット 下』東京大学出版会。
- Watanabe 1912 Kaikioku Watanabe, *Die Bhadracarī, Eine Probe buddhistisch-religiöser Lyrik*. Leipzig.
- Weller 1950 Friedrich Weller, *Über den Quellenbezug eines mongolischen Tanjurtextes*. Leipzig.
- Wogihara 1973 Unrai Wogihara, *Abhisamayālaṅkāra'ālokā Prajñāpāramitā-vyākhyā*. Tokyo.
- Yoshimura 1951 Shūki Yoshimura, *Tibetan Buddhistology II*. Kyoto.

【キーワード】 Dīpaṅkaraśrījñāna, Atīśa, Bodhimārgadīpapañjikā, Bodhipathapradīpa, pūja, śaraṇagamana.